

朝鮮軍記大全

和書門			
二	八〇〇	四	號
一	七	函	架
一	五	冊	類

內閣文庫			
二	八〇〇	四	號
一	七	函	架
一	五	冊	類

內閣文庫		
番號	和	28004
冊數	15	(11)
函號	168	92

廿廿
二九



A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak



朝鮮軍記大全目錄

卷之九

黑田等ラ日本勢ズ不殘ヲ渡海カイ事

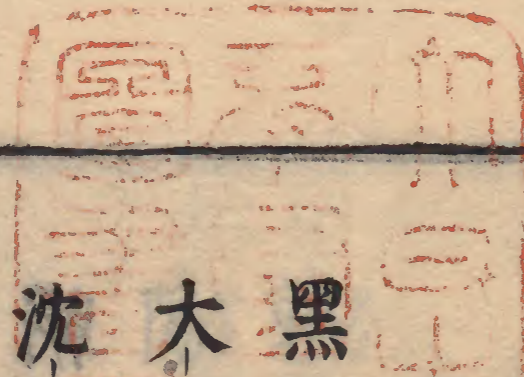
大明エニ援兵ヘイ向朝鮮ムカフ事

沈惟敬ツカス遣使ヒラ清改方ニ事

邢玠ケイ囚トスル沈惟敬ケイ事

卷之三

沈惟敬タカ下獄コク事



明治十四年購求

朝鮮軍記大全目錄

草魚生言フ至オラオラオラ

元均船軍向閑山事

行長破元均舟軍事

元均逃走事

朝鮮處處城守甲乙事

大甲對決向敵事

黑田等日本勢不遂事

陣檢軍防大全目錄

朝鮮軍記大全目錄

卷之卅一

郭趨死義事

陽元聚援兵事

日本勢攻南原事

南原落城事

卷之卅二

喜明等押止南原援兵事



李舜臣船軍事

李舜臣讓功於陳璘事

黑田人數闖解生等事

瀨田深遠決事

瀨田深遠決事

卷之廿一

朝鮮軍記大全日終

朝鮮軍記大全卷之廿九

黑田等日本勢不殘渡海事

既今年七月下旬三成三ノ日本ノ諸勢三番手

黒田長政等ノ諸將ヲ先トシ凡ソ十三方ノ兵凡ハ

皆ハ朝鮮ノ陸地ニ打上リ人々ノ持城其分配ノ定メ

如ク五路ヲ分テ築タリ或ハ登萊機張西庄浦或

豆毛浦安骨浦或作嶋蔚山加徳嵩梁山ノ地ニ續

キ皆日本ノ兵城ニ取り固ム其外熊川金海原咸

安晋州固城泗川昆陽ニテモ日本人ノ横行ノ地ト

ナレハ明人朝鮮ノ人凡ニ此中ニ往來スルノ責ヲ得ス

ステニ日中ニ朝鮮一州ヲ蔑シ大明ニテモ撃入ス

何ノ難キコトカアラフニト若キ諸將ハ窮ニテ方シテ
大明ノ兵軍ノ寄ヒ來ルヲソ待居タル井ヒテ二時ニ
トツテノ難儀アリ朝鮮ノ國中連年ノ兵革暫ク
モ止サリシ故ヲ以テ一國ノ中困窮スレハ米穀最
モ多カラズ是ニ因ツテ日本ノ諸將モ以テ外ノ難
儀トハナリタルナリ殊ニ八頃自風波惡フシテ兵糧
船モ未タ來ラズ二月初方ヨリ渡海スレテ千里入
望タヘテ馬葛糞薪ノ類サヘ不自由ナレハ斯テ護ニ
動搖シテハ行先々ニテ勞困ニ至ルヘケレ暫ク其朋
意ノ全キヲ待テコソ深ク敵地ニ入ルヘケキナリト
諸將ノ相談一圖ニ定リ其ヨリ堅ク籠城ノ計ヲ

ナレ又前々ノ如クニ恣ニ朝鮮人ヲ殺戮スルコトナカ
ルニト各々相謀ヲ極ムルト云ヘ凡軍中ノ雜人其
按ノ正カラサル大將幕下ハ猶其法ヲ守ラズシテ
ミダリニ殺害スルモ多カリケリ爰ニ浮田秀家ノ重臣ニ
カ川肥後守ト云フ人アリ其人カラ武勇ニヒテ又
其事ヲモ解セル意アリケルガ是ヨリ先文祿元年
朝鮮征伐ノ時ニ臨ニテ肥後守モ一陣營ノ部將
タレハ陣屋ヲカケテ兵士ヲ屯ス朝鮮ノ士民トモ
石姓元姓ニ逃竄ルヲ肥後守逃ケ行民ヲ諭シテ
云フ汝等ヲ殺スニアラス少モ恐シヲナスヘカラズト
此等ヲ静メ其商賈ノ具ヲ以テ來レル者ニハ本

標ヲ六百コシテ置キ望ニ任セ。其出所ノ知レタル者
ニコレヲ與ヘ。又其中ニ智惠アリゲナル長シキ者ヲ
撰ニテ其頭ト定メテ外ヨリ入コム間者ヲ防ガス
レバ其長コレヲ吟味シテ在所ノ外ナル無縁者ハ
一人モ其内ニ入サレバ居住ノ民入大ニ悦ビ肥後守
ガ與ヘタル木標ヲ胸ニカケツシテ晝夜ニ用事ヲ
弁スレバ此更ヲ聞傳ヘ四方ノ雜商自由ヨク肥
後守ガ陣邊ニ賣買ルユヘヲ以テ米豆豊カニ材木
滿千炭薪マテニ事カズ魚肉鹽漿ニ至ルマテ不足
ト云フ更ナカリシハ大將一人ノ其法ノ正シキ故ト
聞ヘケリ。其後ニ肥後守ハ他營ニ移リ別將又此

所ニ在陣スルヲ本民ハ先キノ木標ヲカケテ何モノ
如クニ聚リ来リテ。肥後々々ト云ヒケルヲ其辞ノ通
ビヌユヘ此ハ何ヲ云フナルゾト盡ク獲シテ殺シケル
ハ情ナフコソ聞ヘケレ。是ヨリシテ朝鮮人此事ヲ其
傳々ニ云ヒ觸ル日本入ハ虎狼ナリ觸近ツイテ害
ヒラルナ。其軍法ノ定ラス意々ノトリサバキソト云ヒ
聞カセ皆々山中ニ逃ケ入テ商賈ノ道トミレハ多キニ
難儀ニ及ビケルトカマ肥後守歸朝ノ後此更ヲ親
シキ人ニ語り太閤能ク朝鮮ニ向ハセ給フホドナラバ
カ、ル更ハアルベカラス諸將人ヲ殺セルコト實ニ暴虐
ノコトナリナント云ヘリケルヲ。秀吉公ハ自ら聞召スニ

ヨリ此度ノ征伐ニ向ヘル處ノ諸大將ハ此事ヲ警メラ
ルヨリ各々コレヲ策知シテ法度ニ出シケリ

大明援兵向朝鮮事

大明ノ朝廷ニ此度日本ノ大軍再ヒ朝鮮ニ押渡ルニ
付テ朝鮮王ヨリ援兵ノ支ヲ乞申スニヨツテ大臣奏
ヲナシテ曰ク偏ニコレハ兵部尚書石星カ我意ニカセ
テ他人ノ奏ヲ押トメ無抵説ヲ唱フルニヨツテナリ
早クコレヲ詮義ナサルヘキナリト申スニヨリ石星ヲ
尅至フコトシキリナリケハ石司馬コレヲ大ニ恐レテ
沉惟敬ヲ呼ヒ來シテコレヲ責メ詰ルコトモ又キヒシ
カリケルニ沉惟敬今更スベキヤウナクシテ言辭ニダ

レニ陳シテ日本人ノ兵ヲ備スハ朝鮮ノ王子ノ
礼節相違ノコトヲセムルニナリ大明ノ御下知ヲ
背クニアラスト云フヲ徐成楚ト云ヘル者是ヲ折
テ去軍ヲ起スコト十餘萬海ニ浮ブコト千里一ノ
北節ノ不足コトヲ辨フノミテ舉動ナラシヤ由ナ
キ長詮議アラフニヨリハ速カニ其不意ニ無シ虚
又聞ヒテ兵ヲ出シ日本兵ヲ擊除フニハ不如ト云
諸臣一同ニ其罪ヲ以テ石星ニ歸シ遂ニコレヲ獄
屋ニソソハ下シケル朝鮮ノ使者來ツテ大明ノ援
兵ヲ請ヒ求ルコト甚タ以テ急ナリケルサレドモ
大明比年兵數屢起ルヲ以テ兵士ヲ召シ集ムト

月洋軍記

雖トモ募リニ應スル者ノナカリシ故。大明大ニ謀
 動ニ及ヒケル同シク四月ニ明帝。兵部尚書刑部
 以テ総督軍門ノ官トナシ。遼東布政司楊錦ヲ經
 理朝鮮軍務ノ官トナシ。麻貴ヲ以テ太將トシ。楊
 元列。紇董。董一元等相繼テ朝鮮ヲ援來ル。其所屬
 兵士ハ湖東。浙江。四川。廣東ノ軍勢ト聞ヘケリ。西
 五月ニ揚元ガ先手ノ兵士三千ヲ引率シテ。先至ツ
 テ京都ニ留ルコト。五月ナリ。其ヨリ全羅道ヲ下ツテ
 南原ノ地ニ駐リ守レリ。南原ノ地ハ湖嶺ヨリ敵兵ノ
 衝キ來ルベキ。其道路タルニヨリ。殊ニハ其城堅固ニ
 シテ要害ノ宜キ。ウヘニ往時路尚志ガ籠リシトキ

新ニ増築シテ最モ守ルニガテアリ。又城外ニ蛟龍
 山城ノアリケル衆將議シテ山城ヲ守リテヨカラ
 ント云ヒケルヲ揚元聞テ暫時思案ニ及ヒケルガ
 兎ニ角本城ヲ以テ守リヲナスカヨカルヘシトテ
 其ヨリ壘ヲツク。ロヒ濠ヲ浚シ。濠ノ内ニハ羊馬墻
 ナンド云ヘル。攻具ヲ設ケテ晝夜ニ普請ヲ急キ
 ケル故。一月余リニハ其城全ク出來ケリ。朝鮮王李
 昭ハ大明帝ノ命ヲ受ケ新總督ノ官トナリ。其臣左
 兵使成允。門防禦使權應銖ヲシテ慶州ニ陣ヲ備
 へ。鳥嶺ノ敵ヲ防カシ。右兵使金應瑞ヲ以テ宜
 寧ニアラシメ。金山ノ敵ヲ防キトナシ。統制使元均

ヲシテ舟師ヲトツテ作嶋加徳ノ日本勢ヲ障ヘ
ケリ爰ニ朝鮮ノ舟候ノ士歸リ來ツテ云ヤル日本
ノ大將ノ中ニ清正ハ兵糧米一年ハカリノ支度アリ
兵ヲ分テ進ムベシト。日本積ミノ兵糧ノ來ルヲ待
居ルナリ。又々行長ハ兵糧米ノツビテ不來上ハト
テモ急ニ敵地ニ入ルコト叶フヘカラストテ。作嶋等
ノ處々ノ大將凡ニ示シ。七八月ノ新穀熟スルヲ待テ
後敵地ノ食ニツネテ餓久シト相諮スルユ。九洲ノ
龍ノ如クニ深ク城地ノ堅固ニ依テ濟ミ隠ル。タトヘハ
其居城ノ外十里二十里ヲハカリニテ。薪ヲ取ルノ人
足ナドヲ朝鮮ノ舟候ノ兵士ノ擡ヘテ殺スコト有

雖更ニ是等ヲ見又体ニテ。月日ヲ過スノ様子ナ
リ。告報スルニヨリ。朝鮮ノ人心少安マル。懷ヒトナリ
城ノ要害ヲ堅メ。日本勢ノ防キヲナシ。又々方々ヘ
矢風ニラビヘテ逃ケ散リタル者凡モ皆々本ノ如ク
立平回リ己々カ本城ヲソ持コタヘケル

沈惟敬遣使清政方事

爰ニ秀吉公ワサト惟敬ガ方使ヲ遣シ。速ニ朝鮮ノ
三道ヲ割テ我ニ授クヘシト。是ヲハタリ。賁玉ハ明帝
ハ又々惟敬ナシ。日本ノ兵ヲ徵シメサルト。相互ニコレ
ヲ一人ノ罪科ニ歸シテ怒ラル。ニヨリ沈惟敬モ今ハ
詮カタク。惟リ恐懼スルハカリナリ。アリ。今トニ

明洋軍紀

斯テ更モヤ調フベキト。朝鮮ノ僧惟政。松雲ト云ヘ
 ル者ヲ債ヒテ使トシ。清正カ方ヘ一封ノ書ヲ贈リ
 ケリ。其辞ニ大明ノ大將邢珙ト云ヘル者。即今七午
 萬ノ兵ヲ引テ既ニ朝鮮ニ來レリ。公等ノ小勢中々
 以テ敵シヤスカラズ速ク諸將ト凡ニ兵ヲ徹テ退
 レンコト是可ナリ。清正時ニ西生浦ニアリシカ。即チ
 答書ヲアタヘテ曰フ。松雲來テ我ニ告クルニ明共
 來リ進ムト云フヲ以テ。是我カ目頃ニ願フ處ナリ
 夫イカニトナシハ朝鮮ノ兵士ハ懦弱ニシテ。引テ
 テ我カ兵ト搦ヲナラフルコト叶ハス故ニ我心常ニ
 鬱塞リテ固ニコシヲ憐ムハカリナリ。然ルニ今明兵

待承テコレト相逢ヒ快ヨク戰ヲ決シ急ニ攻撃ハ更ニ
 朝鮮ハ置テコレヲ論スルニ不足。旗ヲ晙京ニ進メテ
 米ヲ焚ク。燒テ撃ヤブラシ。此言聊モ僞ルベカラス。寔以
 其身ノ幸ニ恰フ處。何以テカ加之ヤ。唯恨クハ明兵ノ
 來ルコト晚キ。更ヲ我兵ヲ聚メテ。埃ノニナリ。惟敬ヲ
 初メ朝鮮人明兵トモ此返翰ヲ見ルヨリ。大ニ敬馬キ
 騷キタリ。惟敬ハ弥其心。暫時モ安カラ。子ハ又密ニ
 僧ヲ清正カ方。家臣金大夫カ方ニ遣シテ。偏ニ和談ノ
 事ヲトリ持タ。ト云ヒヤルニ。渡邊モトヨリ其意ニ
 從ガ。返書モ亦清正ト相同カリケル故。今ハ惟敬其
 術盡力窮リテ。ナスヘキ道コソナカリケシ

朝鮮軍記大略卷之九

刑珍囚深惟敬事
刑珍モトヨリ惟敬ヲ悪ムコト其心深カリケル今
更惟敬カ術ノ窮リ極ルト見ルヨリ早く獲テ殺ス
ヘシ恐クハ事遅クニ及ヒナバ彼日本へ走リ大明ノ情
實ヲ告ケ知ラセナハ事ヲハカルテ邪魔ヲナルヘキ
ト思ヒスマセハ是ニヨツテ先密ニ書ヲ贈リテ復テ
懇ニトリアツカヒ暫ク惟敬カ意ヲ安シケル然シ凡
惟敬ハモトヨリ邪智ノ多キ者ナレハ月頃ニ中ノヨカ
ラヌ男ノ今ニ至リテ丁寧ノ情アルコト最モ意得
難キコト凡ナリト疑ノ心ヲ起シ身ノ害ヲノガレシニ
今更他ノ計策アルヘカラス偏ニ金山浦ニ走リテ

日本へ反リ忠ヲナスヨリ外ナシト思ヒ立ホカラ彼
處ニテ到ラン路々朝鮮大明ノ軍兵多ク遮リト、
メシハ中々以テ到リ著シニ難義ナルヘシト思惟ニ
ワタルホトバヤ刑珍ガ謀ヲマウケ揚元ヲ三千ノ
兵士ノ大將トシ南原ニ趣シ人具惟忠麻貴等ナ
ラヒニ朝鮮船手ノ大將元均ナシト示シ合テ惟敬
ガ金山浦ニテノガレ行ヘキ水陸ノ道断ラズ遮キリ
抑ヘシム惟敬猶未ダ兵ヲ隨フルコト二百人ニアリ
ケレハ刑珍コレヲウシシテ未ダ易クモ擒ヘカタク
又其夜ニ集シテ遁シサランコトヲ恐ルユヘ別ニ
兵士二百人ノ我ニ親シキ者共ヲ撰ラシメ惟敬ガ

月洋置記

兵二二百人ト無理ニトリカヘテコレヲ奪ヒ。惟故カ
黨ノ立サルヤウニ擗ヘナス。惟敬是非ナク軍兵ヲ
ハトリカヘタレ。此夏ヲ大ニ心ニ憤リヲ含ニテ密ニ
貴國安。張龍ト云ヘル三人ノ者ヲ金山ノ地ニ行カ
シメ。行長ニ對シ日本ヘ降參セント云ヒ送リケル。行
長コレニ同心シテ翌日柳川調信ヲシテ。五百ノ人数
ヲ率シメテ人ヲ先立テ宜寧ト云ヘル處マテ遣シ。惟
敬ガ來ルヲムカヘ召シ。△時ニ朝鮮ノ解痲コレヲ見付
テ調信ガ人ヲトリコトナシテ。惟敬カカヘコレヲ通
セス。惟敬カ使ノ張龍ハ竊ニ間路ヨリ進ニ。惟敬ニ
見ヘ早ク走テ日本營ニ行ベキコトヲ進メケル。惟敬

是ニ同心シテ既ニ擊立ントスルヨシ。邢珍ガ方ヨ
リ代タル兵ノ中ニテ此由ヲ楊元ニ來リ告ク。楊元
聞之ヨリモ事ステニ急ニナリヌルヨト。即チ自ラ
馬ヲ馳騁テ宜寧ノ地ニテ追カケ行途中ニテ惟
敬ガ運ノ極メトテ日本ノ土産ノ爲狹貂ヲ多ク
馬ノ荷ニ付進ニ行ニ出合ケル。楊元ハ惟敬ニ向ヒ日
本ノ和親何如シゾマ。惟敬答テ和親其ナルベカラ
スト云フ。楊元トガメテ和親ナラズンハ吾子何ゾ
真直クニ邢珍ニ申サル。惟敬重テ我慶州ニ往
清正ト交話ヲナシ相調ヘント思フカ。一月ハカリノ其
内ニハ必ス歸リ候ハント云ヒステタル顔色甚々変シ

陷リナシ。南原ノ東ニ雲峯島嶺アリ。其南ニ三浪大
 江アリ。路スジ金海竹嶋ニツビヒテ。是ゾ朝鮮ノ要害
 所タリ。足下ニサニ騎兵ヲコ、ニ於キテコレヲ攻ヨ。其
 其右方ニ閑山島アリ。コ、ニハ邢珣ガ遼東ノ兵ノ三
 千ヲ遣ジテコレヲ守ラス。陳愚衷二千ノ兵ヲ率テ全
 州ノ守リタリ。又朝鮮ノ將金應瑞李元翼ハ雲峯
 ニアリ。權慄元均ハ閑山島ノ邊ニ備ヲナセルガ。皆ク南
 原ノ援ノ勢ヲナス。足下若シ兵ヲ分チ當之テ其後
 ニ南原ヲ攻ルナラバ。暫時ニ其大功ヲ立ツヘキナリト云
 ハセケル。行長モトヨリ南原ヲトリ収メテ。秀吉ノ威
 懾ニ預ランコトヲ欲スル折カラ。此説ヲ聞クヨリ大ニ

悦ビ即刻諸將ト相議シテ。南原城ヲ攻取ラントゾ議
 シタリケル。又爰ニ惟敬ステニ籠獄ノ身ト成ルラ
 聞ケル大明人ハ評判シテ自今後日本ノ嚮導絶テ
 大明ノ禍ノ根ヲ拔キタリト。人皆ヨロコビタリケル
 トカ。同ク八月十四日ニハ大明ノ御史ノ官人ハ沈惟敬
 妻タル陳澹如ガ家ニ入テ闕所スルニ。日本ノ旗一旒
 長短ノ和國ノ刀共ニ三百六十口同國ノ衣服器財細
 絹犀帶日本ノ圖畫ニ三百六十三種。其外サ、和
 物ヲ畜ヘ置ケルヲコトク。是ヲ没入シテ陳澹如
 ヲモ官婢トナシタリケル。沈惟敬大明ノ方曆二十五
 年。癸卯ニイツテ此後。同ク廿七年九月廿四日ニ。

レタリト聞ヘケリ。

元均船軍向閑山事

元均既ニ閑山ニ至ツテ。盡ク李舜臣ガ約束ヲ變ジ
凡ソ裨裨將ヨリ其下ノ士卒ニ至ルニテ。稍ヤク舜臣
ガ多ニ任セラルノ者。臣ヲバ功アルヲモ功ナキヲ
モ總テ斥ケ去ラスト云フコトナレバ。又々李英男ガ
先日元均カ奔リ敗レタル狀ヲ克ク知タルヲ以テ。モ
ツトモコレヲ嫌ヒ惡メルガ故ニ。軍中ノ人々。怨ニ憤
コト少ナカラス。上下ノ心。和セザリケリ。臣ガ閑山
ニアリシ時。堂ヲ作りコレヲ名ツケテ。連
籌ト云ヒ。日夜ニ其中ニ處シ。諸將ト共ニ兵事ヲ論

スル折カラハ。下卒ト雖。臣軍事ヲ言ハントスル者。ア
ルトキハ。來リ告グルコトヲ許シ。以テ軍情ヲ通ゼシ
メテ。其能キヲバトツテ。是ヲ用ヒスト云フコトナク。
毎ニ戰ハントスルトキハ。悉ク裨裨ノ軍將ヲ招キ
計ヲ問フテ。後其謀計ヲ定メ。正シテ戰ヲ合セケ
ル故ニ。敗レト云フコトナカリケリ。元均ハ。今コト法ヲ
コトヒク變レ。自己ガ愛セル妾ヲスヘ置キ。外ニ
ハ重ナル籬キヲカニ。内外ノ隔テヲ密シクカコフ。
ニク諸將ノ事有リテ。其面ヲ見ント欲スル者。ア
リテモ。晝夜ニ酒ノニダシヲチシ遊樂ノ際ナケレバ
彼ニ對談スベキノ時ニレナリ。強テコレニ對面シテ事

ヲ辨セントスルトキハ醉狂ニタリ怒ニ觸ル。トカク
コトクナリケレバ刑罰モトヨリ度ニアラス。操嫌ニ
任セテ斷案ケル。軍將氏松カニ語ツテ如此ノ大
將ハ日本ノ兵來ラズ戰ハスレテワシラン事ノ笑
止サヨト云ヒ譏ル。依之諸將氏カレヲ畏ル意ナケ
レハ其号令モ行ナハレス。時ニ小西行長ハ李舜臣
ガ先立テ戰ノコトヲ返メタル。其料ユヘニ退ケラル
ト聞ヨリモ能キ反間ノ遣レ時ト思ヒケレバ。
間入者要時羅ト云ヘルヲ語ヒ金應瑞ガ方ヘ遣
レ是ヲ給ヒテ云ハセケル。和船ノ軍兵近。日渡海
シテ人數ヲ添フルノ由ヲ聞ク。朝鮮モトヨリ兵

軍ニナレタリ。要害ノ能キ處ニ待承テ是ヲ邀ヘウ
ツナラバ不勝ト云フコト有ヘカラズ。上語ルニ都元師
權慄モツ凡其説ヲ信仰ス。要時羅ハ其機ヲ受テ
李舜臣先立テ加藤清正ガ渡海ヲ抑ヘ留ムベキト
コロニ。延引シテ其機ヲヌカセル故ヨリ。其任ヲ退レ
テ罪ヲ得タルヲ見タマハヌヤナシト。敵將氏ノ實ニ
得心スヘキ品ヲ盡シテ是ヲ談スルニ元師權慄第一
ニ昔ノ上ハタトハバヨカラ又討ナラシメ思者ノ有レテモ
誰カハ強テ是ヲ論セン。中ニモ元均ハ舟中ノ大將タ
ルノ上權慄コレニ命ジテ早ク兵船ヲスハメテ日本船
ヲ抑ヘ留メヨト催促ス。元均前ニ舜臣ヲ譏セントテ

コレヲ詐リ倭船ノウツベキ時ヲ過リテ。舜臣ガ軍ヲス
 ハメス懈リテ勝チヲ失セルナンド。幾回カ云ハハリ
 陷イレタルニ。今其任ニカハリテハ是ニ其勢ノ難キ
 コト有ヲ知リ。和兵ヲバカツテ撃ベカラサル理ヲ
 知ト雖。前ニ言タル言辭ノ相違トナツテハ。入ヲ諺
 セル科ノガレ難キニ付テ。進ニアレキト云コトハ。口外
 ニ亦辭退スベキ品モナケレバ。是非ニ及ハス權慥ガ權
 促ニ任セテ。舟艦ヲ率ヒテ軍セントゾ支度シタリケル
 行長破元均舟軍事

元均ステニ水軍ヲ押出シ。釜山へ新渡海ノ兵アル
 日本人ヲ押ベキ爲ニ出ルヨシ。行長ガ方へ序候モノ

告知ラスレバ。兼テ覚悟ノ前ナル上。襲ツテ戰ハンコソ
 議シタリケル。元均ステニ絶影島ト云処ニ至レル時。舟
 ヲ漂シテ止リ泊ルベキ處モナシ。亦倭ノ軍船ヲ望ミ
 見ルニ海上ニコレモ象浮メテ。風波ノタメニ出沒シテ見
 ヘタルハ是ゾ小西宇喜田ヲ本將トシテ島津兵庫頭
 加勝左馬助。蜂須賀阿波守。長曾我部土佐守。生
 駒讚岐守等カ。五萬余騎ヲ一午トシ。慶尚道ノ右ニ見
 込ニ雲峯スジへ働キ。南原ヲ攻メシ爲ニ押來ル。其
 ト日本新渡ノ兵船ニアラスシテ。爰ニ來ルハ小西行
 長先手ノ兵トモ。元均ヲ兼テ欺キ誘イテ襲ヒウタ
 下ス。ニ來レル軍ナルヲ。元均モトヨリ謀慮ツタナキ

軍將ナレバ。カハル事有リトモイザシラ波ニ敵船ノ
出沒スルト計見ルヨリモ諸軍ニ下知シテ舟ヲ速
メテ進ニ撃ツ。元均ガ兵卒ハ閑山ヨリ遙ノ道ヲ押
渡レハ楹ヲ揺動シテ体ムコトナク息ヲモ繼スニ馳
兵士コトビク飢渴困勞一時ニ極マリ。舩ヲ運スニ法
度ニダシ縦横進退サタマラス乍チ前ハ舩ヲバ亦
乍チ却ゾキテ進ニ堅キ舩モアリ。行長ガ兵舩コレヲ
見ルヨリワザト元均ガ舩ヲ疲カサント思ヒケレバ
テニ元均ガ舩ハ其間近ク來リテ舩ヲ交ヘント
スルバカリニナレバ。行長ガ舩ハ忽チ楹ヲ回ヘシ楯
動レ倘倂テ引キ退キ。共ニ鋒ヲ交ヘズナニス。既ニ

其夜モ深更ニ及ヌレバ波風レキリニ厲シクシテ元
均ガ舩ハ四方ニ散ジワカレテ。漂流レ行ク方ニラスナ
リニケル。元均コハニ餘舩ヲタニモ収メ集ルコトヲ得ズ。
元均ガ舩ハ遂ニ流レテ加徳嶋ニ到リ着ク。舩中ノ
軍士渴ル事ツヨクシテ前後ノ量見ニモ及バス。船ヲ
舩ヨリ下リテ水ヲ取ル。兼テヨリ行長左馬助ガ
兵此處ニ楹ヲキタル兵陣ナレバ。頓テスカサス。船ヲ
イテ掩ヒ撃ツ朝鮮ノ軍共ハ右様ヲ見ルヨリヤ
レ日本人コソ起リ來レリ。早ク舩ヲ押シ出シテ命ヲ
助レト謀ギ多ツテ。誰カ一人戰ヲ合セント云フ者ナク。
我レ先ニト逃ゲ行ヲ爰ニ押ツメ彼ニ漕ツキ殺リ死

セハ朝鮮ノ將士凡コ、ニテ討テ取ラル、者。暫時ノ
間、ニ四百余人ト聞ヘケリ。

元均逃走事

元均ハ此度ノ戰ニ思ヒノ外ノ負ケ軍ヲ引出シ稍ク
ニ打洩サレノ兵船ヲ收メ集メテ亦キ退キ。巨濟ノ怨川
嶋ニテ到リツク。權慄ハ此時ニ固城ノ地ニアリケルガ。元
均ガ此度一事ノ得タル所モナク。却テ大ナル味方ノ弱
ニヲナレヌル事ヲ怒リ。早速ニ檄ヲ傳ヘテ元均ヲ召ビ
コレヲ杖ウチ督責シ。更ニ船軍ヲ進メテ功ヲ建ヨ
トセメハタル。元均ハ權慄カ爲ニ耻辱ヲ蒙レル事ヲ
憤リ。還テ兵ヲ進ムルノ意モナク。忿懣ノアマリニ酒

吞ンデハ醉ヲ促シ。晝夜ニ聯臥ノ外ハナシ。倭王諸將ノ
用事アル者是ト事ヲ談ゼシ爲メ。元均ガ幕ニ來ル
ト雖凡醉卧セバ事ヲ辨スル事不可。幾回モ夕々空
シク回ルノミナリケリ。日本諸將ノ存候凡此有サレテ
ヨク見定メ。急キカヘリテ小西ガ軍ニツケ知ラスレバ。
小西大ニ悦ビ或夜潛ニ船ヲ促シ。元均ガ油斷ノ處ヲ
フツヒカ、ツテ殺リ入レバ。元均ガ軍兵大ニ混シテ逃
ナリ。遂ニ三戰ヲモ交ヘガリシハ。アハレナリケル有様
ナリ。元均モ稍ヤク走リテ海邊ニテ到リ着。船
ヲ棄テ岸ニ上リテ走ラントシタレ凡。元均ガ生レ
ツキ以テノ外ニ肥フトリ趕走ルコト鈍フシテ。歩ヲ

スハムル事アタハ子バ。傍ナル松ノ樹ノ下ニ潜リカヘツ
テ息ヲコロシテ隠レ居ル。左右ノ兵士猶コノミテモ
三十余人ハツキマトヒシガ。此有様ヲ見ルヨリモ。トテ
毛頼△ニ甲斐ナキ男ト思ケニ皆打チステ散クニテ
リ行タリ。其後元均和兵ノ爲ニ擒トナリテ殺サレタ
リトモ言ヒ傳ヘ又或ハ命バカリハ辛クモ遁レ出タリ
ト語レ凡。實ヲ知ル人ナカリケリ。李億祺ハ戰スニ
極レバ是ニテトヤ思ヒケシ。船ノ上ヨリ海波ノ中ニ飛
コンデ身ヲ没シテ空クナリニケリ。實ナルカナ大將
ハ三軍ノ司命ニシテ克ク戰ヘハ國ヲナシ。悪ク戰ヘハ
人ヲ七ボシ其身ヲ破ルト。元均ガ其器ニアラザル一

人ノ故ヲ以テ。舜臣ガ争下ニシテサレモ勇功アリ
シ將士用ナレド。元均ガ下知ニ付テ一戰ノ功ヲモ不
破レスルコソ憂テケレ。元均ガイマダ破サル以前ニ襲
楔ト云ヘル手下ノ將。元均ガ必ズ敗レシコトヲ知リスル
故。屢々其幾ヲツゲテ諫レ凡。元均必ズ不用之ヲ。
是日ステニ戰ハントスルニ及テ。又ユレニ謀ヲス。メテ云
フ。叅川島水浅シテ地窄シ。船ヲ行ルニ不利アラザル
ノ処タレバ。早ク他ノ所ニ陣ヲ移スベシ。元均ニテ敵
テ不用ハ。襲楔今ハロシカタナク。自巳ノ一手ノ人数ヲ
分ツテ。軍船ヲ一所ニ聚メ。戒メラ。嚴クシテ。其變アル
ヲ窺ツテ。日本ノ兵軍ヲソヒ來リ。港ヲ奪フヲ見バ。

速ニ走ラント待居タルガ既ニ小西ガ兵又襲ヒカハルト
見ルヨリ手ノ下ノ船ニ下知ヲナシ先立テ走リ去ル
ガ全軍獨リ全フ残リケリ。裴榘ハ其ヨリモ閑山島
中ニ到リテ陣屋ニ火ヲ放ツテ廬舎ヲ焚除テ糧穀
軍器ニ至ルニテ盡ク焼ステ。閑山島ノ餘民ノイニ
シラス民マテ日本勢ノ寄口來ラサル以前ニ墜チ
去レド。下知ヲ加ヘテ盡ク去クタリ。

朝鮮処ニ城守甲乙事

日本勢ステニ元均ガ船手ノ軍ヲ奪ヒ破リテ閑山
島ヲ棄トリケレハ舟手ノ通路自由ヨロシク往來ソ
ノ勝手ヲ得タリケル。サラバ南原城ヲ討トルベト

評定ヲナシ同ク七月廿八日ヨリ先手ヲクテ出シテ
南原ニ攻入ラントス。兼テ定ムル約束ニ全羅慶尙忠
清ノ三道ハ宇喜田秀家ヲ大將トシ。小西行長ハ先
鋒タリ。島津隆湏賀長曾我部加藤左馬助生駒ガ
組手五萬ノ人數コレニ從フ。一々ハ亦毛利秀元大將
ニテ加藤清正前鋒タリ。黒田長政。淺野幸長。惣兵
五方コレニ隨フ。此手ハ又慶州ヲ棄シ密陽大丘ノ地ヲ
スギ全義館ニイテ王城ノ明兵ノ出來ラバ共ニユレト
相戰ハント議シタリケル。中納言秀秋ハ釜山城ニ在リ
ケルガ家臣山口玄蕃允伊藤雅樂助南部無右衛門
數人ニ八千人ノ兵士ヲ指添ヘ秀元。清正等ト相共ニ

兵ヲ忠清道ニ働カント擬シタリケル。是ヨリ先キ倭
 察使李元翼元帥權慄其道筋ノ山城氏修理ヲ加テ
 日本勢ヲ防ントシ。公山金鳥龍紀富山等ノ城ヲ築
 ケリ。公山金鳥ノ城ハ民ノ力ヲ用ユルコト。尤モ中ニモ多
 テ。悉ク傍ナル郡縣ノ器械糧餉ヲトリ納メテ。其中ニ實
 守令ノ官ヲ於テ是ガ奉行トナシ。民間ノ老弱男婦ヲ
 盡ク城中ニ取り入テコレヲ守シムル故。遠近凡ニ驛立
 シガ今度再ビ日本勢ノ動搖スルニ及テ。清正ハ既ニ西生
 浦ヨリ西ノ方全羅ニ向ヒ。マサニ行長ガ水路ノ兵上所
 ニ入會シテ南京ノ地ヲ攻トラントシタルニ。元帥權慄ヲ始
 其餘ノ諸將モ風ヲ望テ引去ノニテラズ。又處々ノ山城ニ

へテ守ル者凡ヲモ令ヲ傳テ早ニ城ヲアケテ各々
 去リ。日本勢ノ鋒先ヲ避ケタルニ。惟義兵將郭再佑ハ
 ノ三昌寧火王山城ニ入り死ヲ期リ。是ヲ守テ下覺悟シタ
 リケル。清正ガ一年ノ兵城下マテ既ニ押奇タル。城形勢ヲ
 御キ見ニ山岳壁ヲ堅タルガ如シテ。其要害ノ堅城ナルノ
 ミテラズ。城内モ又静リカヘテ。敵兵大勢カ寄せ來ルニ
 勤スル様子モナキヲ察スルニ。中ニタマスク。攻城スベキ
 倭ニモアラ子バ。慄ヒニ小城一ツヲ墜シカ子由ナキ。此ニ
 隙入レテ。日ヲ費サシハ益ナキコト。マ思ヒケシ。此城ヲハ
 攻レテ頓テ入。数ヲ引キ擧ゲ前途ヲサシテ急ギケリ。
 朝鮮軍記大全卷之三十一終

朝鮮軍記大全卷之三十一
(以下は非常に淡く、ほとんど不可読な文字が並んでいる。これは複製の際の影写ミスや、あるいは非常に浅く書かれた文字によるものであると推測される。)

朝鮮軍記大全卷之三十一

郭趁死義事

爰ニ安陰縣ノ監官郭趁前咸陽郡主趙宗道ト云ヘ
ル者。處々ノ山城ヲ守リシ大將也。コノ頃ク明ケ退ク
中ニ黃石山城ニ閉チ籠リ。敵來ラバ一障ヘ防クヘキ
覚悟シテソ居タリケル。前ノ金海府使白士霖モ亦
同ク城中ニ入ニケリ。士霖ハモトヨリ勇義ノ人ニ超
タリシ英武ノ武將ナリケレバ衆人ユレニ意ヲ倚セテ
重シ頼ニカケタレナリ。斯テ加藤清正等ガ一年ノ將兵
程ナク黃石ノ山下ニ押奇セテ相戦フ。日本勢ノ勇
威ヲ見ルヨリ俄ニ意悞レヤレタリケシ。士霖ハ思ヒノ外

武者アリ悪ク人ヨリ先ニ逃行タリ。依茲城中ノ守兵
大ニ潰レテ守リヲ失ヒノガレ散スレハ郭趨今ハ階之
カツキ其子ノ履祥履厚二人モロ氏ニ敵兵ノ中ニカケ
入り共ニ討レテ死タリケリ。趙カ女子ハ柳文虎ガ妻タ
リシガ此度文虎戦テ倭兵ノ爲ニ擄トナル。郭氏スニ
城ヲ出タリシガ此由ヲ聞ヨリ其婢女ニ告テ云フ。父
テニ死タルニモ死セズシテ存命セルハ夫アリトスル故
ノニ然ルニ今亦夫モステニ敵ニ執ハルトヤ。吾何ゾ生
タリテ甲斐アラント思ヒ切リ。自ラ經レテ死タリ
ケル。又趙宗道ト云ル部將ハ同ク城ニ豎テ籠リシガ
味方ノ勢ノ日本ノ兵士ヲ畏レハカカリ。我先ニトノ

ガレ行シヲ見ルヨリ。獨言レテ我豈ニ奔シリ寃ルノ
徒ト共ニ死スルコトヲ艸間ニナスベキ。幸ニ此城ノ防
キアルコト本望ナレ。今ハ死トモ何ノ恨カアルベキト
則チ妻子ヲ率テ城中ニ入りケルカ。詩ヲ作りテ
曰ク崆峒山外生猶喜。遠城中死亦榮。トツイニ郭
趨ト共ニ討死ニシテ。義忠ヲ此世ニ留メケル。

陽元聚後共事

閑山ノ水戦元均ガ破レノ報ゲ到リケレバ。朝廷野分フ
ルヒ駭キコ、ニ大ニ畏レテ。朝鮮王ノ行在所ニハ諸大臣
ヲ召レテ此議ノ評定ヲ問尋ラル、ニ群臣大ニ惶惑
スレバ誰アツテ谷フル所ヲ知ルモノナレ。慶林君金命

元兵曹判書李恒福等ユレニ對ヘテ奏スルヤウ。今
 度ノ破レニ於テ空ガチニ日本勢ノ強ナルニ非ズ此元
 均ガ罪ナルカナ。當ニ李舜臣ヲ起シテ統制使トナ
 シテ防之シムベシト議スルニ朝鮮王モ亦此奏ミレタ
 カヒ李舜臣ヲ以テ三道水軍統制使トナシ玉フ。此
 時權慄元均ガ敗レヲ聞ヨリ。折フシ李舜臣ガ幕下
 アリシヲ促シ閑山、鷲ニ往シメテ。元均ガ殘兵ヲ収メシ
 ム。此時清正、黑田、毛利ガ人數是彼ニ頗レテ衝キミ
 ダセバ意ヤスク打通ルベキヤウナキヲ。李舜臣ハ軍
 官一人ヲ召具シ慶尙道ヨリ全羅道ニウケ入ニ。昼
 夜トナク潛リ行キ。ヤウ、ニ珍島ニテニ到リ付キ。

殘兵ヲ集メテ和人ノ通路ヲ遮キリ止メントシケリ
 ケル。爰ニ大明ノ大將揚元ハ南原ニ到リシ始メ城壘ヲ
 増シ築クコト。既ニ其ノ高サ一丈バカリニシテ。城外ニ
 羊馬牆ヲ掘ヘ処、ニ砲ヲ發スベキ爲ノ穴ヲ多ク
 穿チテ。ヒツシト火炮ヲスヘナラベ又城門ノ外ニ火炮
 數ヶ所ニ掘ヘタリ。濠塹ヲ鑿ルコト其深サ一ニ丈バカ
 リニス。其外品々、要害ノヒニアルヘキ事ニ意付イテ
 油斷アラセ又陣手タリ。爰ニ閑山ノ軍船又テニ元均ガ
 敗レヲナセシヨリ。日本水陸ノ大共謀ヲ合セテ攻奇セ
 來ルノ告グステニシキリナリシカハ城中大ニ洶々シテ
 人民コトク逃ク散レテ兵卒ステニ殘リ少クナリ。

今ハ總ニ陽元カ領スル所ノ遼東ノ兵馬三千余騎ノ
 三城中ニシユリケル揚總兵コレヲ見テ斯テハ日本ノ
 大軍ニ小勢ヲ以テ敵レ難キノ理リヲ察レ初撥ヲ
 發シテ全羅ノ兵使李福男ヲ召ヒテ同ク城ヲ守
 レム。福男モトヨリ無勢カニシテ大軍ニ相敵シカタキ
 コトヲ悟リテ急ニ到ランコトヲ憚リテ遲參ニ及ス。
 陽元レキリニ使者ヲ遣シギヒシク催促ナシケル故ニ
 是非ニ及ハス。福男ハ率イル所ノスカニ數百人ヲ
 以テ出來ルカ、リケル所へ光陽縣李春元助防將
 全敬老モツヒテ急ニ出來レリ。是レハ日本ノ兵
 日本勢攻南原事

同八月初ツカタ日本ノ兵軍陸地ノ兵將毛利加藤ノ
 兩寺ノ兵ノ其外ノ諸大將スベテ十方ニアミレル人数ニテ
 南原ノ城下寄セ來ルステニ忠清道ニ打入レバ其ノ兵
 威ノサカシナルコト懼レテ生ジ雲峯ニ陣トリタル權標
 李元翼ガトモガラモ爰ニ出向ヒ戰フベキノ意モナク
 皆々ノガレテ東境ニ引レリシク。秀家行長義弘嘉明
 ガ輩モ軍列ヲトノヘテ。サニ南原城ニ向ハントセシ時
 陣愚衷カ全列ニ備ヘテ南原コトアラハ彼所ヲ援ヒタ
 スケント撮ヘタルヨシ聞ヘケルユヘサラバ全列ニ向ヒ彼カ
 兵軍ノヲサヘヲナスヘシ誰カ彼ニ向ハンスルツサラハ闔下
 リテコソ向ハメト。各々闔ヲトリタルニ義弘嘉明ノ兩

將全列ニ到ルベキノ聞ニアタレバ島津兵庫頭加藤左馬助ノ兩人ハ全列ノ手當ニサタマリ。秀家行長ハ四萬餘人ノ人數ヲ以テ南原ニ押行ケル。同十三日先百餘騎ノ人數ヲ以テ物見ナガラニ城下ニ出シ城兵ヲ誘カセ鳥銃ヲ放テ頃刻ニシテ引返サス。其外ノ人數ヲワカツテ皆々田畝ノ間ニ散シ伏レテ或ハ三人或ハ五人隊ヲオケレ既ニサツテハ又來ラシムルコト。凡ソ數度ニ及ビケル。コレ小物見ノ使武者。敵城ソヤウヲ候ハニタメナルベシ。城ノ兵卒小砲ヲ以テコレニ應ジテウチ出セドモ其ノ程トシラシテアタル事ナシ。小西浮由が大軍ニツ遊兵ヲ以テ戦ヲ交ヘサツトカハツテ颯ツト

引キタカヒニ出テ速ニ馬ヲ馳チガフル故ヲ以テ城中ヨリ砲ヲ発シテモコレニ中ルコト少カリシハ朝鮮イニダ砲ノ術悉ク日本ニハ及バスト聞ヘタリ。守城ノ諸卒ハ又倭軍ノ丸ニ中ラレテ斃ル者ハ返リテコトニ多カリケルガ、ル所ニ小西カ陣ヨリ兵騎ヲ出シ城下ニ到ラセ城上ノ人ヲ叫ンテ案内ヲ通スレハ城中ヨリ揚エガ家ノ騎一人通事ヲ召具シ出向フニ則チ一書ヲ相渡セルハコレ其戦ヲ求ムル處ノ日限ノ約ナト聞ヘケリ。同十四日ニナリヌレハ日本ノ諸將一々ノ攻場ヲ定メテ卷ヨセ來リ。凡テ城ヲ圍ラスコト稀麻竹葺ノ如クニ三方ヨリ卷結一方ヲバ明タリテ

ルハ古ヨリノ法ニシテ城中ノ士卒ノ心ヲ一ニ思ヒキテ
セスシテ逃ル者ヲハ逃サシ爲ト聞ヘタリ是ヨリ前
此城ノ南門外ノ民家稠密ク立ツキタルヲ敵兵ノ
寄來レリト聞クヨリモ揚元ハ兵士ニ下知シテ自焚
サセコトニク焼除ヘル其跡ニ石堀ヤ土堀ノ多ク燒リ
タルヲ日本勢ハコレニタヨシテ城ヨリ撃出ス火砲
矢ノ小楯ニトツテ其隱ヨリ城ノ上ナル兵士ニ子ヲ
七定メテ打斃ス本ヨリモ鳥銃ノ上手ヲエラ三出ル
コトナレバ空矢ハ一ツモナカリケリ。

南原落城事

日本ノ大將小西浮田ノ人々南原城ヲ攻ムルコト既ニ

三ノ二及スト繼尾揚元モ遼東ノ大將ニシテ北狄ノ虜ヲ
防グニナレタリシ者ナレバ城ヲ守ルコト堅固ニシテ
射立撃斃シ火砲弓矢ノ密シキ今ハ寄手モ攻アケン
テガラバ此陣中クツロケ重テ攻具ヲ調ヘテコソ寄
スヘケレト持ロラコソ退ケレ其ヨリ小西等ハ城邊ノ
水田ニ人走ラセ稻禾ヲカラセ大束ニ纏ケ把子テ幾許
トモナク外アツメテ石堀土堀ノ間ニツシテ其日ノ暮
ヲ待居タリ城中ノ者凡ハ敵方ニ如此ノ討アリ凡聊カ
ハカラズ日本勢ノ引退クヲ偏ニコノ城ヲ攻アグシテ退
キケルヨトノ三意得テ人々ノ心油断シナガラサレ凡兼テ
急アラバ來リ援ヘキノ約束ナル遊撃將軍陳愚衷三千

六騎ヲ領シテ全列ニ在ナカラ未夕來リテ相援ノ事
 フモナサレハ南原ノ軍人益ス意ニ慎リテ生シ全列モ
 早ヤ敵ノ爲ニ圍メレシヤ何如ニ援兵ノ遅カルラン若モ
 敵ノ爲ニ圍ニ留ラレ兵ヲ出スコトノ不能カ然ハ此處
 孤城トナツテ後ノ道ノ絶ユルナラバ敵ノ大勢何如シ
 レテカハ防ギトクヘキト。堞ヲ守レル軍士已カ達
 性ニ頭ヲ交ヘ耳ヲヨセテ相計リシガ。此日モステニ
 晩ニ及ニテハ馬ニ鞍置キ道レントスル氣色アリ其夜
 モ早ク一更ニ過ギナシカト思フトキ。日本ノ兵陣中
 忽チニ驚シク謀キ立チ大ニ人ノ起リ動スルノ聲スル
 フ。城中ノ金孝義ト云ヘル軍官ハ南門ノ外ナル羊

馬牆ヲ守リテ居タリシガ。此聲ヲ聞ヨリ耳ヲスマシ
 テ何事ノ喚聲ナラシト窺ハ相互ニ應答シ物ヲ運ブ
 ノ狀ハ晝ルホドヨリ川集タル縮束トテ城壘ヨリ高ク
 積ミ上ケテ一面ニ聲ヲ揃ヘテ其上立テテ鉄
 炮ノ筒先ヲ城ニ押し向ケ亂レ放テバサナガラ電ヲ
 フラヌガ如クナリ。城上ノ防ギノ兵敵ヨリ打出テ鉄炮
 ニ打スクメラレ頭ヲ縮メ形ヲ隠シテ外ニ向テウカヒ
 見ル者一人モナカリケル其ヨリ二時バカリヲ過キ巽
 コヘ程ナク止ミケルガ州東ステニ濠ニ瓦チ陸池トテ
 ナレクナリタリ。レカノミナラス羊馬牆ノ内外ニテ塹
 積タルガ。是モ數刻ノ間ニ城ト同シキ高サニテ。

ヲ倭軍ノ兵士我先ニト城ニ上リ。内ニ攻テ入ラントス。城中コレヲ見ルヨリ大ニ亂レ。倭人ステニ城ニ入ルゾト喚呼ビノガレ走りテ。城中ニ止マル者ハナカリケリ。金考義ハコレヲモ知ラズ南門ノ外ナル羊馬墻ノ番將トナツテ居タリシカ。慌テ忙ヒテ城ニ入りテ見テアレバ城上ニハ已ニハヤ一人モナカリケリ。唯ニ城内ノ処ヨリ火烟ヲコリテ燒アガレバ。斯テハ如何ニ防グヘキト奉輦李栄芳。劉之鸚ト云ル者三人打ツレ北門サレテ逃出レハ明兵ノ軍勢コトクク馬ニ騎ツレ門外ヘニケ出ントスレ。門關カタク閉タルニヨリ容易テハ開キカタクシテ門内ニ並ビ立タルユヘ騎馬ノ足共ハサナカラ

東子タルゴトクニシテ。街道ニ填塞チテ冠ノ蹤跡ハナカリケリ。既ニシテ門モ漸クヒラケタレバ軍馬ハ門ヲ爭ツテ出テノガル北ノ手ハ加藤清正ノ兵ニテカタメタレハ其士卒ステニ城外ニ三千テ城ヲ圍ニ匝スコトハヤニ重ニ重ニアマリケル。何かハ以テタメロフベキ各々要路ニ立向ヒ鎧長カラヲツトリ。べ菜肉ナントヲキルゴトク。大明勢ヲトリヒレキ。當ルヲ幸ニナギタツレ。明ノ大兵一人ト是ニ敵スル者モナク首ヲ俛頭カヘテ偏ニ和兵ノ斬ルニ任ス。適天月ノ明朗ナル夜ナリケレバ漸クニ隱レヲ求メテ脱レ出タル者凡十百ノ内幾クモナカリケリ。揚總兵ハ家ノ騎馬僕

從數人氏二馬ヲ馳セテ突キ出テ。僅ニ身ヲ以テマ
ス。或ハ又倭人氏コノ男總兵ト知タリケル故ニ
知ラス。然レモテナレワガト是ヲ遁シタルト云ヘル説モ
アリトカヤ。金孝義ハ李榮芳。劉之鸞ト打ツレテ是モ
同ジク門外ニ出タレド。榮芳之鸞ハ日本勢ニ出合既ニ
一人氏二騎リ殺サル。金孝義ハコレヲ見ルヨリ足バヤニ水
田ノ中身ヲ跳ラセ州中ニ隠レ卧シタレハ倭兵モ亦己
ヲ目ニカケス其儘ニステタルニ危キ命ナガラヘテ
日本勢ノ退ケルヲ待テノチ困窮艱難ヲキハメツ
クシテ李昭ノ行在所ニ至ケリ既ニ南原陥リタル
故金列以北ハ瓦ノゴトクニ破レ解ケ。日本勢ノ陣營ト

ソナリタルケル。大明へモ此度遂ニ聞ヘケレバ揚元カ
レタル國威ヲ辱ルノ罪ヲ以テ誅セラレ首ヲ傳テ朝鮮在
陣ノ明將氏ニ示シケリ。朝鮮ノ諸將氏ハ倭兵ノ既ニ城ヲ
棄ルト見ヨリ今ハ是ニテト思ケン李福男ヲ始トシ南原
府使仕鉉助防將金敬老光陽縣監李春元其ノ外
明將ノ接伴使鄭期遠ヲハ一寸モ戰場ヲ退カス日本
勢ニ敵對シテ。ノコラス討死シタリケル。小西宇喜田
其餘ノ諸大將ニ到ルニテ。何モ此度ノ御キ自ラ手ヲ
碎キタル戦ユヘ其功速ニ成就スルノニナラス分牒ノ首
數三千余生捕ハク相添テ。金山城へ注進スツテ急
日本へコレヲ詔ヘ大閣ノ御感ニコレハ預リケレ。終

明洋軍中大臣卷三十一

二千ニアール人数籠城ヲ養フコト叶ハスヘカラスト。此城
 預リノ朝鮮人コノ趣キヲ云ヒケルヲ。愚衷聞テツクゴト
 思案シ地勢ヲ考テ如何カ。此ヨリ十里バカリ外
 ナル地ニ米豆甲冑等ニテ隠セル所アルヘシ。其ヲホツ
 カナキ處ニテサガサセケルニ案ノ如ク山深ク畜ヘ
 置ケル米豆弓箭ニテ多ク覓メ出シテ城内ニ取
 入レントセシトキ朝鮮ヨリノ酋主居ノ者。コノ事ヲ
 迷惑ニ思ケレバ万一日本人急ナルニ城ヲ明ケ退ク
 トキハ糧米器械等ニナク城ニ取入ナバコレ寇ニ兵ヲ
 備セルガ如キ禍ノ種ナラン。時ニ當リテ諸用アルベ
 キ兵糧米ヲ。ハコビ取リ至ヘト雖ヘモ愚衷コレヲ得

心セス晝夜ヲカキラス。兵具米穀ノ類ニテ取りハコバ
 セテ籠城ノ支度ヲナスカ。ル処へ楊元方ヨリ統ノ
 使ヲ引ガ如クニ使者ヲ通シテ援兵ヲ求ム。愚衷コノ
 時領ズル所ノ兵士大明人ワスカニ二千ハカリナルニ
 朝鮮ノ兵ヲ指加ヘテ二千ニハ適ヌ。小勢ナリ併ラ
 南原ノ圍ヲウクルノ急ナルヲ聞テ行キ救ハントス
 處へ早く義弘嘉明ガ來リ進ムト云ヨリ。全列ノ
 士民等大ニヲトロキ迷ヒテ騷動スルヲ。愚衷極テ
 コレヲ制スレト。却テ士民大ニヲコリ。刺ヘ全列ノ城ヲ攻
 倉稟ノ米穀ヲヤキステ。四方ニ逃ケ散シテ跡カタナ
 シ。愚衷大ニヲドロキ先ツ此混ヲ治メ制セントシテ。

諸官人ワレリ回リテ暫クノ暇モナキ折カラ。日本入ス
テニ仕實ニテ到リ著ヌト昔來レバ愚衷モ今ハコノ城
持コタユル事叶フベカラズトヤ思ヒケン邊ニ慌テ騷テ
城ヲ奔テ遁ケ逃ル義私等即時ニ全列ヲトリ収メ
米穀鐵炮弓矢等一テ取アツメ敵ヨリ若ヤ襲レテハ
悪カリナシゾト用心キビシク定メ置キテレハラク久
馬ヲ休メケリ

李舜臣船軍事

統制使李舜臣ハ元均ガ閑山島ノヤブレノ後チ再々
水軍統制ノ官ニ進メラレ閑山島ノ撃チ洩サケ人
數ヲアツメ珍島ニ至リ兵船ヲ収メ拾フコト終ニ

十雙アメリヲ得タリケル其ヨリ海ニ隨テ東ニ下リ
ケル爰ニ頃日ノ亂ヲ避ケ船ニ乘レテ海ニ浮ビケル者ソ
ノ數ヲシラス多カリケルガ舜臣再ビ到ルト聞クヨリ
人ニコレヲ喜悅セズト云者ナシ茲ニ於テ舜臣道ヲ
カツテ人ヲ遣シ此者托ヲ招キ呼レハルニ氣船レテ
進レタル輩ヨノ事ヲ聞クヨリモ遠近ヲ論セス雲
如ニ集リテ李舜臣ガ軍ノ後ニシタガツテ其軍勢ヲ
タスケシム爰亦波多三河守ハ先度朝鮮征伐ノ初
其軍功ノナキニヨリ大閣ノ怒責ニアヒ肥前名護屋
ノ領地ヲモ没入セラレ今ハ絶ニ懸命ヲ以テ黒田
長政ノ手ニ屬レテ居タリレガ如何ニモ一戦ノ功ヲ

以テ先度ノ耻ヲ洗トモ亦ハ運命コトニ極ニスル
 ヲク殺死セシニハ如ベカラスト思ヒ定メテ居タリケリ
 爰日本諸將行長一手ノ二百余艘西海ヲウタシ
 逆フ李舜臣ト碧波亭ノ下ニシテ日本船ト出合
 リ舜臣カ船ヲス力ニ数十余隻ヲ以テ日本ノ二百
 余隻ニ對シテ相戦フコトニ多少ノ分割ヲタル
 へカラサルノ勢ナレ氏舜臣モトヨリ智謀ノ將ナレ
 バ十二船ニ大炮ヲノセテ是ヲ軍ノ前ニス、又潮ニ象
 レ流ニシタガヒ攻之テ相タヘカフ李舜臣ガ兵ヲスム
 ルアリコトノ急ニシテ日本勢ハコレニ驚キス、ニ方
 子テ見ヘタル處ヲ李舜臣コレヲ見ルヨリ急ニ炮

船ニ下知シ。ハカヘモミタテ攻タル故コトゴク打ニタサレ
 テ多クノ人数ヲ失フベカリシニ波多野ガ舟カヘレ
 合セテ一船七十五人ノ者不残コトニテ撃レシユへ小
 西ガ兵ハ危キ所ヲ遁ケリ是ニ於テ李舜臣ガ軍
 聲大ニ振ヒ其兵ステニ八千餘人ニアリケル其レヨ
 リ舟ヲ古今島ニテ押進メ爰ニ暫ク軍船ヲ駐メ
 タリ并レテ糧ノ安ナキコトヲ憂ル故ヘソノ謀計
 ラ廻ラシ海路通行帖ト云フモノヲ作りテ令下
 シ忠清慶尚全羅三道ノ海上ヲ往還スル公儀船
 私家ノ買船等ニ至ルマデ一ニ無所ノ船ヲハコレヲ
 敵ヨリノ奸船トサタメテ委細ニ論シ通行スルコト

ナカレベシト觸狀ヲ廻シ。高ク札榜ヲ掲ケテ此コトヲ知テシメタリ。於是ヲヨソ亂ヲ避ケテ船ヲ棄テ生涯ヲナセル者凡ハ三ナク來テ帖ヲ受ク。舜臣其船ノ大小ヲ以テ差ヲ定メ米ヲ入レテ帖ヲ受ヒ。其法大船ハ三石ヲ出シ。中船ハ二石ヲ納メ。小船ハ二石ニ涯リ。定トス。亂ヲ避ルノトモカラ其在所住居ヲ離ルハトテ。財穀ヲノセテ海ニ入タルユヘニ此米ヲ納ルヲ以テ大ニ難キコトトセズ。返テ終ノ財ノ出シ通行ノ禁ナキコトヲ喜トナスニヨリ。旬日バカリノ内ニヲイテ軍糧一万余石ヲ得タリケル。又民間ノ壯者ヲ募リモトメテ。銅鉄ヲ輸

大砲共ヲ鑄立サセ。木ヲ伐リテ船ヲ造リタツ事。皆其用ヲ辨シタリ。偕ソレヨリ遠近ヲカギラス。兵士ヲ集ムルニ兵難ヲ避ル者凡ハ皆ユイテ舜臣ニ依リ頼ミ。壯ナルハ兵トナリ。老弱ハ食物ヲ販キ。器財ヲ賣テ生涯ヲ立テ。廬ヲ作り陣營ヲ結テ人々集リ。村里ヲナセバ島中イハ八人多クシテ居所ナキ程ニナリニケルカ、ル所へ大明ノ水兵都督陳璘カ出テ來リテ。南ノ方古今島ニ下ツテ舜臣ト兵ヲ合ス。陳璘ガ性ツキ暴シテ勇猛ナリサルニヨツテ他ノ人多クハカレガ心ニ忤フコト多フシテ相容サ子ハ畏レヌ者ハナカリケリ。朝鮮王李昭ハ

陳璘ヲ相送リテ青坡野ニシテ餞ス陳璘カ軍
兵氏大ニ傲リ驕ツテ朝鮮國ニ行入テ處々ノ
守令ヲ歐チ辱メテ更ニ忌憚ルコトハ嘗テナ
ク繩ヲ以テ察訪李尚規カ頭ヲ繫テコレヲ曳キ血
ヲ流テ面ニ滿シム譯官ヲシテ其理ヲ云ヒ延ドモ
コレヲ羨引スルコトモナシ是等ノ事ヲ見ニツケ
李舜臣ト一キニナリナバ陳璘カ暴厲ナルヲ以
舜臣ヲ侵シ侮ルトキハ舜臣ガ切作フタビ屈ク
ナツテ陳璘ト矛盾セニコソウタテケレト朝鮮ノ
諸大臣トモニ寄合ヒテコレヲ憂ヒナケクノミ
ナリケリ

李舜臣讓切於陳璘事

舜臣ハステニ陳璘ガイタト聞ヨリ軍人ヲ令シテ
大ニ佃シ漁ドリヲナサシメ多クノ鹿豕海鱗ノ取リ
アツメ盛ニ酒醪ヲトハノ備ヘテコレヲ待ニ陳璘ガ
船海ニ入り近ク來ルト告タリケレバ舜臣ハマク軍ヲ
行列ヲ調ヘ遠ク迎ヘテ相接シ大ニ軍人ヲ饗應スル
ニ諸將以下諸卒ノ輩ニ至ルニテ醉飽セスト云コト
ナシ陳璘ガ士卒氏大ニコレヲ喜ニテ相告ゲ語リテ
兼テヨリ手柄法度ノ疎カナラス人体ト聞ツルガ果テ
ウタガヒモナキ名將カナト云フラス陳璘モ亦夕心ニ
是ヲ喜ビケル斯テ日本水手ノ兵船近島ノ邊ヲ侵

サントテ出テ來ルヨシ。舟候ノ者來リ告ルニ舜臣
頓テ兵船ヲ遣シテコレヲ敗リ。首ヲ取ルコト四十余
級ニ及ヘルヲ。舜臣是ヲ以テイサクカ巳が功トセス。
陣璘ニユヅリケレバ陳璘ガ喜悅ノゾミノ外ニ出テ舜
臣ガ志ニ感ジケル。是ヨリシテ凡ノ事一ニ舜臣ト共ニ
ハカリ出ルトキニ舜臣ト轡ヲナラベ巳大將ナリ
トテ聊モ敢テ先立ツ事ハナシ。舜臣ツイニ天明ノ
軍勢ト巳ガ軍トヲ一ニ合シ。少モ間テナカラシム
軍兵ノ中ニ於テ民人ノ物トシテ一縷ヲ奪フ者アリ
トテモ則チコレヲ吟味シ糺明ヲナシケレバ少モ其
令ニ違フコトナク島中コ、ニ肅然トシテツシニシラ

ソレス者モナシ陳璘コ、ニ上書シテ統制李舜臣ガ
天地ニ經緯セル才能ノ良將タルコトヲ進メ賞シテ
自モ大ニ心服シタリケルハ實ニ舜臣ガ良將ノ能ア
ツテ國ニ忠アルヨリ私心ノナキガシルシナリ

黒田人數聞解生等事

刑玠コ、ニ南原全列ノ陷ルヲ聞ヨリ。陳愚衷ガ罪ア
ル處ヲ明帝ニ奏聞シ。亦王李昭ヲ責テ云フ夫日本
ヨリ來テ朝鮮ヲ攻伐コトハ是大明ノ耻ナラズヤ故ヘ
天共數十方野外ニ暴露雨風ヲ侵シ寒暑ニ困ムコト
巳ニ年久シ然ルニ朝鮮王李昭ヲ始トシ其餘ノ大臣
イサ、カモ戰フ心ナシ。其生辱メラルハトキハ臣死ス

ト云ヘルノ義ニ於テ何ニ有ルヤ。此度南原ノ敗レ全列
ノ陷ルコト。總ニ皆是李昭カ過ノ在ルトコロナリト云
李昭モ此督責最モノカレサル處ナルニ驚キ恐レ又
ナハチ八道ノ兵士ヲ催促シ刑玠ガ命ニウケ従シム
同ク九月ニモナリヌル頃秀元長政ヲハ全義館ニ到者
ス。此全義館ト云ヘルハ王城ヲ去ルコト遠カラ子バ太
明ノ副總兵解生ハ日本ノ兵士ノ直ニ王城ニ入ニ事ヲ恐レ
其兵ヲ稷山水源ノ兩處ニワカチ備ヘテ以テ日本
勢ヲ防グベキ手當トハ爲シタリケル黒田長政ハ
此手ノ先鋒トナツテ寄來ル。朝鮮ノ兵軍モトヨリ
日本ノ勇威ヲ恐ルニヨリ日本ノ諸軍ノ押シ過テ

前ワタリヲナセ凡城ニ籠レル者凡ハ城ヲ守リテ
敢テ打出テ遮ギリ止メントスル者モナレ故ニ秀
元等ガ所向敵ナク路道縱横ニ往來ヲナシタリケ
リ。長政ガ先手ノ兵ハカラスモ解生ガ軍ト相逢タリ
長政ノ家臣栗山備後守。後藤又兵衛等五十騎ハカリ
ノ兵隊ヲス、ノ急ニ解生ヲ撃テリ。解生ガ擊將揚登
山。遊撃牛伯英ヲ來救テ黒田ニ將ヲ直中ヲツリカ
コンテテ攻撃タリサレ凡後藤栗山ハ日頃キコフル勇
者ナレバ敢テ少モ是ヲ恐レズ大明ノ三將ト相接シ
東ニ撃テ西ニ突キ左リニ旋リ右ニ轉シテ。二重ニ
重ニ圍ミタル敵兵ヲモノ、カズ凡思ハバコソ遂ニ安ク

圖ヲマブリテ出タリケリ。長政ハ先陣ス。テ敵ヲウ
 ケタルト見ヨリモ左右ノ隊陣ニ下知ヲナシ自軍ヲ来
 幣ヲトリテ二千ノ人数ヲ賢ニ進メテ撃テカハルニ。
 秀元ノ先隊モ先手ノ大将戦ヲ交ユト見ルヨリ。モ口鐘
 ヲ合セ馬ヲ跑タテ、サツト懸イリ大明勢ノ備ヘノ
 真中見スマシ横ヤリニイレタレバ解生ヲガ兵軍一
 度ニハツト乱レ立ツテ靡クツル李益喬劉遇節兵
 進テ應援ヲオセハ解生コレニカヲ得テ又戦フ長政
 重テフルヒ撃テ先ヲ驅レバ季元ヲ始トシ其余ノ
 諸將ヲ整ヘテ跡ヨリレテ進ニカハルハ偏ニ大海ニ蒼
 波ノ起ルガ如クナリ。解生コノ勢ヲ見ヨリイヤク

事ノ不祥ナリト思ケン。速ニ引奉ノ鐘ヲナラレテ早ニ
 陣ヲ退ケル日巳ニ西山ノ雲ニ落キ返照モワスカ
 旗指物ノ旒ニコレル影ゲ薄キ時ナレバ日本ノ諸將
 モ今日ノ戦コレニテナリトテ。其ヨリ敵ヲ追弁
 リケリ

朝鮮軍記大全卷九二終

